鈴木有郷牧師説教

2/27/2011 「神の沈黙とイエス」 エレミア12：1−4

私達夫婦はイスラエルを10日程旅しました。ガリラヤ湖の美しさに感嘆し、死海の静けさに心を打たれました。エルサレムの人ごみと狭い路地に驚き、イエスが十字架をかついで通ったとされる「悲しみの道」を歩きました。

ローマの皇帝の命令で造られた1万5千人を収容する競技場を訪れ、野外劇場の席に座ってみました。すべて石と大理石で造られたこれらの建物を建設した知識と労力に驚嘆しました。

高い丘の上に建てられたヘロデ王の宮殿の建築は、現代の建築知識をもってしても及ばないそうです。地中海に面した砂浜に建てられた彼の別荘の美しさにこれまたびっくりしました。2000年前のローマ文化の質の高さに舌を巻きました。

しかし私は、同時に、その背後に隠れた人間の罪とその恐ろしさに愕然としました。ヘロデ王とその息子達、そして彼らに追従したエリート達の建て上げた栄華と栄光は、すべて例外なく、貧しく、抑圧された人々の血と汗と涙とうめきの結晶なのです。

決して人間として扱われることのなかった人々の悲しみの声が、何十トンもある石で造られた宮殿の屋根や壁、そして床から聞こえてくるようでした。

しかし権力者やエリート達の目には、労働にかり出されたこれらの人々の存在は全く入っていなかったに違いありません。なぜなら、もし抑圧された人々の悲惨さに気づいていたなら、到底あのような宮殿や別荘を建てることはできなかった筈だからです。

エリコでは、キリスト教徒をライオンの餌食にし、それを見て拍手喝采する観客を収容した競技場を見て回りました。あの壮大な文化を造り上げた人々は、同時に人間がライオンに餌食にされる光景を娯楽として楽しむ人々でもあったのです。

私は競技場の石の席に座り、そこから虐殺が行われたフィールドを見下ろしながら考えました。牙を剥いておそいかかるライオンと向き合った時、クリスチャン達は何を思っていたのだろうか、と。興奮し、歓声を上げる観客に囲まれた彼らの心をよぎったものは何だったのだろうか、と。

私の脳裏に浮かび上がったもの、それはバビロニア帝国によって葬り去られたイスラエルを目の当たりにした時の、預言者エレミアの神への叫びです。「正しいのは主よ、あなたです。それでも、わたしはあなたと争い、裁きについて論じたい。なぜ、神に逆らう者の道は栄え、欺く者は皆、安息に過ごしているのですか。」

私は実に驚くべきことに気づきました。クリスチャン達は信仰を捨てなかったのです。彼らは権力者に信仰を捨てるから許してくれと懇願しなかったのです。彼らは主イエスに従う者として、つまり信仰者として息絶えたのです。

何故そんなことが可能だったのでしょうか。自然の美しさを通して神と出会ったからではありません。自然の美しさはヘロデ達によって残酷と残虐の場に変えられてしまいました。人間の創造的可能性に感心して神と出会ったのでもありません。人間の可能性は、傲慢とエゴイズムの手段とされてしまう程にもろいものだったのです。

ライオンに食い殺されながらクリスチャンが信仰を守りきったのは、彼らが主イエスを通して神と出会っていたからです。主イエスのリアリティーが彼らを掴んで離さなかったからです。主イエスこそ神の慈しみの啓示であり、肉体化であることを確信していたからです。「重荷を負っているすべての人よ、来なさい。私の下に。慰めてあげる、そのあなたを」という言葉に魂を捉えられていたからです。

イスラエルを旅して帰ってきた私の皆さんへのお土産は、次のようなメッセージです。」誰が私たちを救ってくれるのか。何が人間を本当に人間らしい人間へといざなってくれるのか。何が私たちの希望と勇気の源なのか。それは、自然の美しさではない。人間の創造的可能性でもない。主イエスこそ我らの岩、我らの砦、我らの隠れ家。主イエスこそ救い主。我らの王、我らの友。」